指定の下着を履かないと脱がされる学校。おちんちん丸出しの男子と全裸の女子達。

とある高校の2年C組の教室は、9月の涼しい朝、異様な緊張感に包まれていた。開け放たれた窓から秋の風が流れ込み、白いカーテンが軽く揺れるが、30人の生徒――男子15人、女子15人――の心は嵐のようにざわついていた。今日は年に一度の抜き打

ちで行われる「服装検査」の日。朝投稿して黒板に「服装検査」と書かれているのを見て初めて生徒達はそのことを知ることになる。この学校の校則は異常に厳格で、男子は白ブリーフ、女子は白ブラジャーと白または黒のパンツ、スカート丈は膝上5センチ以内に定められている。違反者はその場で「是正」を命じられ、違反した衣類を脱がされ、隠すことも禁止。その姿で下校まで過ごさなければなら

ない。このルールは生徒たちに極端な羞恥と恐怖を植え付け、教室に重い空気を漂わせていた。

教壇には先生が厳しい面持ちで立っていた。眼鏡の奥の鋭い目は生徒たちを一人一人見つめ、まるで心の奥まで見透かすよう。黒いスーツに身を包み、教卓に手を置き、「服装検査を始める。男子からだ。呼ばれた者は前に出なさい。隠すことは一切禁止だ」と低く響く声で告げた。教室は

一瞬で静寂に支配され、30人の生徒の呼吸音だけが微かに聞こえる。男子はズボンを下ろして下着を、女子はセーラー服とスカートを脱いでブラジャーとパンツを検査される。違反者は即座に脱がされ、晒された姿で一日を過ごすのだ。

教室の空気は張り詰め、生徒たちの内心は恐怖と不安で渦巻いていた。誰もが今日の自分の制服や下着を思い出し、校則違反の可能性に怯えて

いた。山田悠斗は前列の席で、教科書の角を握り潰しながら心臓が早鐘を打つ。「昨日、洗濯忘れて…青のボクサーパンツだ。やばい」と頭の中で何度も繰り返し、額に冷や汗が滲む。隣の佐々木健太が「山田、顔色悪いぞ」と小声で囁くが、悠斗は「黙れよ」と鋭く睨み返す。後ろの鈴木大翔はふんぞり返りながらも、「白ブリーフだけど…ちょっとキツいんだよな」とサイズの小ささに不安を感じ、太ももを

握りしめる。田村直樹は窓際で汗ばむ手でペンを握り、「黒のトランクス…バレたら終わり」と顔を青ざめさせ、窓の外を見つめて現実逃避を試みる。松本和也は「白ブリーフだから大丈夫」と自分を励ますが、隣の生徒の震える肩を見て落ち着けない。

女子の席も同様に騒然としていた。川中優香は窓際で短いスカートを指でつまみ、「これ、絶対5センチ以上…ピンクのブラに水色のパンツもダメ

だ」と唇を震わせる。高橋美咲は教科書に目を落とし、「白ブラジャーが洗濯中で…ベージュを着ちゃった」と唇を噛み、指先が震える。田中彩花は隣の林優奈に「今日、なんかやばい雰囲気だね」と笑うが、内心では赤いパンツと短いスカートに後悔していた。田村華子は前列で背筋を伸ばし、紫のブラジャーと短いスカートを思い出し、「なんで今日に限って…」と焦る。山田弥奈は後ろで「グリーンのパンツ

に短いスカート…最悪」と顔を両手で覆う。小林花香は白ブラジャーが洗濯中でピンクのブラジャーを着てしまい、黒パンツは適切だがスカートが短い。村松七海は黒パンツだがピンクのブラジャー、金田沙雪未は赤いブラジャーと赤いパンツに短いスカートで全て違反。沙雪未は「まぁ、なんとかなるでしょ」と強がるが、心の底では恐怖が渦巻く。優奈は水色のパンツと短いスカー

トを思い出し、「忘れてた…どうしよう」と青ざめる。

「山田！ 前へ！」先生の声が教室に響き、静寂を切り裂く。悠斗は心臓が止まりそうになり、椅子から立ち上がる瞬間、足が震えた。健太が同情の目を向けるが、すぐに視線を逸らす。悠斗は教壇の前に進み、女子15人の視線が背中に突き刺さる。美咲は「山田君…」と心配し、彩花は好奇心から目を細める。「ズボンを下ろしなさい」と先生。悠斗

の手が震え、ベルトに触れるが動かない。「先生…みんなの前で…」と訴えるが、「規則だ。早くしろ」と冷たく返される。悠斗は顔を真っ赤にし、ベルトを外し、紺色のズボンをゆっくり膝まで下ろす。青いボクサーパンツが現れると、女子の席から小さな笑い声と「え、青！？」という驚きの声が漏れる。彩花は「へぇ、オシャレじゃん」と目を輝かせ、優香は「山田君…可哀想」と同情し、沙雪未は「青か、なん

か良いかも」と評価する。「ボクサーパンツは違反だ。脱ぎなさい。隠すな」と佐藤教頭。悠斗は「こんなの…無理です！」と声を震わせるが、教頭の目は無慈悲。教室が静まり返る中、悠斗は観念し、ボクサーパンツのゴムに指をかけ、ゆっくり下ろす。